

ひとほくでの研究と思い出

今年3月に定年退職を迎える、中瀬副館長、服部研究部長、大谷主任研究員のこれまでの研究や思い出などを紹介します。



楽しい実践と学びの期間でした

大阪府立大学の農学部でランドスケープ関係の研究・教育に19年間関わった後、ひとほくで23年間、ランドスケープに加えて、兵庫県各地での、多自然居住地のまちづくり・地域おこし、公園・博物館のマネジメントの実務を通じて、現場を重視した実践的な研究ができました。ひとほくでの研究成果に、学術論文の他に、単・共編著25冊の本があります。内訳は、「アメリカン・ランドスケープの思想」等のランドスケープが9冊、「もりの人まじり」等の地域づくりが5冊、「みどりのコミュニティ・デザイン」等の阪神・淡路大震災関連が7冊、「パークマネジメント」等の公園マネジメントが2冊、「新しい博物館の試み」等の博物館マネジメントが2冊です。大変楽しい期間でした。

中瀬 勲(自然・環境マネジメント研究部)

世界一の兵庫の自然

兵庫県内には日本一あるいは世界一と認められるすばらしい自然がたくさんあります。その一つが私の学位論文にもなり、また博物館に展示されている「氷上回廊と生物」です。氷上回廊とは表日本側と裏日本側を加古川と由良川の低地帯で結ぶ経路のことです。太平洋岸から大阪湾岸をまわり、加古川を上って分水界を越え、由良川を下って若狭湾に達するという生物の大移動は氷上回廊だけで見られ

るものです。また、川西市黒川に残る平安時代以来の本物の里山景観はまさに世界一とよべるものです。さらに大都市の背後にそびえる六甲山は世界一の都市山として、瀬戸内沿岸のたくさんのため池も世界一の池沼群として、尼崎市に建設されている尼崎の森中央緑地も世界一の生物多様性公園として認められます。このような世界一の様々な自然について学ぶことができたのはたいへん幸せでした。

服部 保(自然・環境再生研究部)



世界一の都市山・六甲

世界一の里山景観(川西市黒川)

尼崎の森中央緑地における生物多様性植栽(尼崎市)



氷上回廊を北上するカナメモチの分布

背番号付きミツバチの収穫ダンス

ミツバチの行動を長く研究しています。一匹一匹に背番号をつける唯一のテクニックは(写真1、2)、個々のハチの行動を深く理解することができます。大学院時代は、「ミツバチの全行動型」を研究していましたが、博物館に来てからは「収穫ダンス」という行動型に絞りました。収穫ダンスの中の「尻振りダンス」について、いろいろ予備的な観察をしてみると、含まれている「距離と方向の情報」が働きバチに理解されていないように見えます。しかし、多くの研究は「働きバチ間で情報は伝わっている」という前提の下に行なわれており、膨大なデータで「ダンスコミュニケーション」仮説をつくりあげています。当面の目標はこの仮説を突き崩すデータを取ることです。2012年は、最後の科研費の2年目で、予備実験(写真3)、本実験(写真4)という試みましたが、働きバチがうまく餌場に通ってくれず、データ採取は空振りに終わりました。

大谷 剛(自然・環境マネジメント研究部)



写真1 タックシートに打ち出した3桁の番号を働きバチの背中につけていく



写真2 観察巣箱に放された背番号付きの働きバチ



写真3 予備実験をしたイチゴ栽培用のビニールハウス



写真4 神戸大学にある地下トンネルでの実験

nito haku news paper

ひとほく新聞

人と自然の応援情報誌

ハーモニー80号 24枚 02-006A3



〒669-1546
兵庫県三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館
(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)

http://hitohaku.jp

博物館と地域の未来を拓く「ひとほく将来ビジョン」

ひとほくは20周年を迎えた今年度、数多くの記念行事と並行しながら、これまでの歩みを振り返りこれからの展開を考えるために「博物館と地域の未来を拓く「ひとほく将来ビジョン」」づくりに取り組んでいます。

これまで、ひとほくではいくつかの構想や計画をつくり、目標を定めながら活動を展開させてきました。2001年に策定した「人と自然の博物館の新展開」では、博物館に閉じこもることなく、館外に出かけて地域で博物館活動を実施する「ひとほくキャラバン」を展開し、様々な地域とのつながりを生みだしてきました。さらに、2007年には「兵庫県立人と自然の博物館基本構想」を、翌2008年には同「基本計画」を策定しました。この構想・計画のなかで、「生涯学習院」や「演示」などのキーワードを示して、活動の柱としてきました。また、新館構想についても県民の皆さまが主役となるような新たな機能を果たす空間を提案しています。

残念ながら新館については実現に至っていませんが、汗を流せば実現できる部分については、可能な限り実践を重ねてきました。開館20年の節目にあたり、変化する社会状況に対応しながら、いま実践すべき戦略を検討し、これからのひとほくが目指すものを示すのが「ひとほく将来ビジョン」です。ビジョンの作成にあたっては、多くの方々にご協力を頂きながら、プロセスそのものを共有しつつ内容を深めています。まず、20周年の前年にあたる2011年度から「ひとほく将来検討勉強会」を開催し、多くの専門家の方々からご示唆を

頂きました。さらに、2012年6月1日には、ひとほく将来検討委員会および同専門委員会を設置し、3回の本委員会および専門委員会や関係者へのヒアリング等を重ねながら、ビジョンの検討を進めてきています。また、20周年記念シンポジウムでのパネルディスカッションをはじめ、20周年記念行事の様々な機会を通じて、関係者や県民の皆さまと一緒にひとほくの将来を考える場を設け、ビジョンの内容にフィードバックしてきています。

ビジョンの内容は、1. 将来像として「生涯学習院の到達点と今後の展開」、2. 事業のあり方として「地域と協働した博物館活動の実践」、3. 運営のあり方として「組織体制・マネジメントのあり方」の3部構成となっています。特に、これからのひとほくが目指すべき方向性として、①変化する社会状況に対応する、②研究・シンクタンク機能を強化する、③好奇心を刺激し学び続ける仕組みを提供する、④担い手の成長を支援し活躍の場を創造する、⑤多様な主体と連携し地域づくりに貢献する、の5つの行動指針を掲げました。また、マネジメントの面では、多様な主体が関われる仕組みとして、コラボレーション組織の設立の必要性についても提案しています。

このビジョンは、ひとほくの今後あるべき姿を描くと同時に、日本の博物館の進むべき方向性も示唆するものであると考えています。年度末には策定・公表する予定です。

武田重昭(企画調整室)

創造と共生の舞台・兵庫で参画する皆さんが共演する生涯学習院

生涯学習院とは、①驚きや喜びを感じ、自発的で自律的な学びを支える/②県民の参画と協働で、知識だけでなく創造性を育む/③年齢や立場などによる、様々な学習のかたちに対応する/④感じるから伝えるまで、トータルな学習プロセスを提供する/これらを実現できる「人々が集い、学び合う参加・交流型の博物館」です。



様々なソフト・ハードを活かして学び続ける仕組みを提供していきます

遠くて近い島 ひとほくコラム

ーボルネオ島

日本から遠く離れた赤道直下にあるボルネオ島で、私がアリの調査をはじめ、もう20年になるつもりです。高木が鬱蒼と繁り屋でも薄暗いボルネオの森に初めて足を踏み入れた時は少し不気味で、心細く感じたことを覚えています。それから、毎年のようにアリの調査を続け、たった1本の木から日本本土に棲むアリ全種に匹敵する種類のアリを採集したこともありました。この圧倒的なアリの多様性が他の生物たちと共生すること、この島の豊かな多様性を紡ぎ出しているのではないかと、たくさんの標本を基にボルネオのアリ相を把握できるようになった私が、次に取り組んでいる研究テーマです。

この20年間にはアリの調査以外に、ボルネオで様々な活動をする機会にも恵まれました。たとえば、1995年に、ボルネオ島にあるサバ大学でアリの研究をしていたマリアツティ教授と出会い、翌年、彼女を人博に招聘したのが契機となって、サバ大学との交流事業が始まりました。それから、ジャングルスクールで子供たちを連れてきたり、淡路花博のためにラフেশアの採集をしたりと、博物館の仕事でもボルネオを訪れるようになりました。2002年には、JICAのボルネオ生物多様性保全プロジェクトが始まり、その専門家としてサバ大学で指導をするため2年半に渡って現地暮らしを経験しました。

初めは遠くに感じたボルネオ島も、今は身近な地になりました。私に色々な発見や体験をさせてくれたボルネオ島の豊かな自然を残していくためにも、これからもボルネオで研究を続けていきたいと思います。

橋本佳明
(兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)